

小林千古のパリ時代

——〈パンテオン会〉の友情とその意味

今橋 映子

(東京大学大学院教授・比較文学比較文化)

今からすでに二十年ほど前のこと、『パンテオン会雑誌』という手書き三冊の雑誌を初めて見せられ、これを広く世に知らせる方法が学問的にあるかどうか、個人的に相談されたことがあった。百年も前に作られた雑誌と聞いて驚いたが、それに画家たちが多数関わっていると云っても、難しい崩し字の文章、俳句、漢詩等ざらりと並び、いわゆる「美術雑誌」とは違うと推測され、正直大変困難な資料だと思った。

しかしその私が、それでも直感的に「おそらく将来必ずや研究すべき貴重資料だろう」と感じたのは、『パンテオン会雑誌』三冊に含まれていた(数こそわずかだが)何枚かの絵画、挿画、そして装飾文様などに、とても心惹かれたからだった。その筆頭が「Banko」というサインのある水彩画——「月のシャビール」(小林千古、1901年)(8P参考図版)だったのである。百年の歳月を経たとは思えないほどの水々しさを保った画面。深く豊かな濃い藍色の闇の中、街路へと洩れ出る(居酒屋らしい)光の暖かさ、それは上弦の月の光と呼応して、静謐な空間をつくり出している——千古は一体なぜ、この画をこの雑誌に遺したのだろうか。

*

「パンテオン会」とは、1900年パリ万博を機に、多数集まった日本人留学生たちの間で結成(11月)された親睦団体である。提案者は洋画家・黒田清輝と法学者・寺島誠一郎である。驚くのはそのメンバーの多彩さ——土井晩翠(詩人)、芳賀矢一(国文学)、箕作元八(西洋史)、美濃部達吉(法学)、矢部辰三郎(医学)等々、後に各分野で知られる錚々たる名前をそこに見出せるのみならず、陸・海軍、官公庁、実業界のエリートたちや、子爵・伯爵家の子息にまで及ぶ、いわばエリート留学生たちに加え、美術家たちが多数参加している。しかも彼らもまた、洋画、日本画、建築を問わず、のちに各界の代表的存在となる人材ばかりである——和田英作、浅井忠、岡田三郎助、中村不折、竹内栖鳳、久保田米斎、塚本靖、武田五一……など、1901年3月に入会した小林千古を含め、以上総勢60名に及ぶ「会」なのであった。今回の展覧会では、こうしたパンテオン会関係の画家たちの作品も多く集められており、実に感慨深い。

パンテオン会はその多彩な顔ぶれから、一種紳士クラブ的な性格が強いと思われがちなのだが、例の手書きの、わずか三号で終わってしまった『パンテオン会雑誌』(第1号=1901年5月25日、第2号=同年9月21日、第3号=1903年3月吉日)には、むしろ仲間うちのからかひや、ユーモアの精神がたっぷりと盛り込まれていて、その自由闊達さに心なごむものがある。

例えばあの黒田清輝の若き日の渾名は「ドッコイ」(起き上がりこぼしに似ている体型)、土井晩翠は「タワシ」(お米をタワシで研いでいた!)、和田英作は「村長」(パリ日本人村の世話役)といった具合である。今や遺族ですら知らない「新事実」であろう。

残念ながら小林千古の「渾名」が何であったか判っていないのだが、今回の展覧会に登場する画家たちの仇名をついでに紹介しておく——

岡田三郎助=ヤソ(会合のテーブルに着く時、肅然とテーブルに就くので)
久保田米斎=ヨネヤン(京都生まれで「美少年」の彼が、芸子衆に付けられた仇名)
浅井忠=親方(会員で最も年上。依頼されたことを断らない「古侠客」の風から)
塚本靖=妻君(誰もが知る愛妻家)
竹内栖鳳=ドスカ(京都の人ゆえ「そうどすか」が盛んに出る)

パンテオン会の会合では、互いを必ず渾名で呼ぶ合うことが規則とされており、その親密な雰囲気かばかりかと、彷彿とさせる。

彼らの多くが下宿していたオテル・スフロー(Hotel Soufflot, 5 rue Toullier, Paris)が、パンテオン(偉人廟、パリ第五区)の近くにあったので、この会の名称が生まれたのである。彼らが手書きで制作し、おそらく会員の誰もがオテル・スフローで手に取れるようにと遺された回覧雑誌は、その下宿の経営者シッテル夫妻、および息子アンドレ氏(故人)によって大切に保存され、1980年代末ようやく日本側関係者(本野盛幸元駐仏大使)に託されたのであった。現在はパリ日本文化会館図書館で、大切に保存されている。そして2002年、私を含め多領域の専門家が集まってチームを結成し、3年間の月日をかけて、雑誌の翻刻とデジタル化、そして研究の成果を公表するに至った(『パリ1900年・日本人留学生たちの交遊——「パンテオン会雑誌」資料と研究』ブリュッケ、2004年)。こうして、百年前パリに集まった日本人留学生たちの、思いも寄らない交遊の様子が、初めて広く世に知られるようになったのである。

*

小林万古(1870—1910)[パリ時代はまだ「千古」を名乗っていないため、以下「万古」で記す]は白馬会系の画家であるが、経歴の上では太平洋画会の画家たちに類似している。渡米して自活し、彼地で画家修業を充分積んだ上でパリに留学した。1900年12月17日、万古は黒田清輝を訪ねたことから、その御蔭で「パンテオン会」仲間との交遊が始まったようである。万古の当時の住所は(雑誌第一号の記録によると)「カンパーニュ・プルミエール街三番地」であり、もしこれが正確なら、同時期フランス人彫刻家フランソワ・ポンボン(1877—1933居住)が同じアパルトマンに住んでいたはずである。その後年ルルケや高村光太郎、藤田嗣治など多くの芸術家が、この同じ通りに暮らしており、いかにもカルティエ=ラタンらしい場末の賑わいを見せていたところだった。万古はその年の大晦日から元旦にかけては、パンテオン会の仲間および外国人画学生数十人と、「十九世紀の末日を送る汽笛を合図に、一同狂気の如く祝杯を挙げて」賑やかに年を越した、と嬉しく書き遺している^(註1)。

翌年1901年4月上旬の数日間、万古は岡田三郎助、久保田米斎と子供モデルと一緒に写生していたが、その最中4月17日夕刻に、突然発熱して危篤状態となる。やはりパンテオン会会員・矢部辰三郎医師の診察をすぐに受け、フォブール・サントノレ通りの病院に入院。入院は実に二カ月に及んだ。その間5月11日のパンテオン会晩餐会で、書記の久保田米斎の発案により万古への見舞金が徴収され、集まった32フランが届けられた。その証拠となる資料も近年発見されており、その詳細は、本カタログ所収の山田博規氏論文をご覧頂きたい。さらに6—7月には、岡田三郎助に案内されて、パリ郊外のシャヴィエユ(Chaville、パリの西郊、ヴェルサイユより東)で静養したと伝えられる。つまり私が最初から心惹かれたあの水彩画「月のシャビール」は、万古が病を癒すその滞在の記念として描かれ、同年9月発行の『パンテオン会雑誌』第二号を飾ったものだったのである。異国の地での長期療養の淋しさを支えたのは、間違いなくパンテオン会の仲間の友情だっただろう。万古は帰国後、黒田清輝の推挙で、学習院女学部で

教鞭を執っており(1906—08年)、1911年わずか41歳で早世したその才能が惜まれるが、晩年を彩った人間関係の豊かさは、こうして近年改めて明らかになったのである。

*

パンテオン会は自由な親睦団体であったため、特に彼らが共同体として、特別なものを生み出したわけではなかった。しかしわずか三冊残された『パンテオン会雑誌』には、俳句や漢詩、戯曲などにまで興じる画家たちの「知的活動」の幅広さ、1900年当時は絵葉書やそれに付随する「装飾美術」が、油画と同等以上に若いアーティストたちの強烈な関心を惹いていたこと——など美術史上見逃せない事実も浮かび上がっている。小林千古に限って見ても「月のシャビール」が、現存する彼の唯一の水彩画であることは、大変に貴重であろう。

パンテオン会自体は、こうした単なる親睦団体であったが、その人間関係は彼らの帰国後にまで活かされ、雑誌『三越』(久保田米斎編集長)の活動、慶應義塾図書館の装飾や、自由劇場公演の舞台背景協力(和田英作、岡田三郎助)など、意外な広がりを見せる。

そうした事実から、現代の私たちにとって何より興味深いのは、小林千古を含む百年前の青年たちが、留学という機会の中で、他領域多分野の人間と知り合い、共に助け、何より愉しみ、それがその後の一人一人の人生と仕事をすら豊かにしていったのだと、今改めて知ることなのである。

[註1] 同記述は、小林千古が布哇仏教青年会の機関誌『同胞』に寄稿した「通信」(1901年10月29付、浄土真宗本願寺派布哇別院の開教師である今村・松本両師に宛てた手紙を転載したもの。パリ滞在の記録)の一節である。現在、「千古小林花吉遺録」(はつかいち美術ギャラリー蔵)に原物が貼付されているものだが、残念ながら『同胞』の巻号は判明していない。

同資料をご教示頂いた山田博規氏に心から御礼申し上げます。

[参考文献]

『小林千古』展カタログ、はつかいち美術ギャラリー、2007年

高階秀爾監修/今橋映子、ロバート・キャンベル、馬淵明子、山梨絵美子責任編集

『パリ1900年・日本人留学生の交遊——『パンテオン会雑誌』資料と研究』ブリュッケ、2004年

手塚恵美子編『研究資料』同書所収

今橋映子 『『パンテオン会雑誌』の位相——新資料出現の意味』同書所収

今橋映子 『異都憧憬 日本人のパリ』(柏書房、1993年/平凡社ライブラリー、2001年)

写真提供

ウッドワン美術館
海に見える杜美術館
株式会社日動画廊
千葉県立美術館
東京藝術大学大学美術館
広島県立美術館

写真撮影

オーシマ・スタジオ
タケミアートフォトス

表紙図版

- 〈左上〉 小林千古「パッション」(部分)
1901年 はつかいち美術ギャラリー蔵
- 〈右上〉 岡田三郎助「花」(部分)
1928年 ウッドワン美術館蔵
- 〈左下〉 和田英作「田園風景」(部分)
1897年頃 笠間日動美術館蔵
- 〈右下〉 黒田清輝「昔語り(画稿)」(部分)
1896年頃 笠間日動美術館蔵

小林千古没後100年
廿日市市・モン・サン=ミッシェル観光友好都市提携記念

小林千古と1900年パリ・パンテオン会

2011年10月7日発行

発行 (財)廿日市市文化スポーツ振興事業団

はつかいち美術ギャラリー

〒738-0023

広島県廿日市市下平良一丁目11番1号

TEL.0829-20-0222

編集 はつかいち美術ギャラリー
山田博規

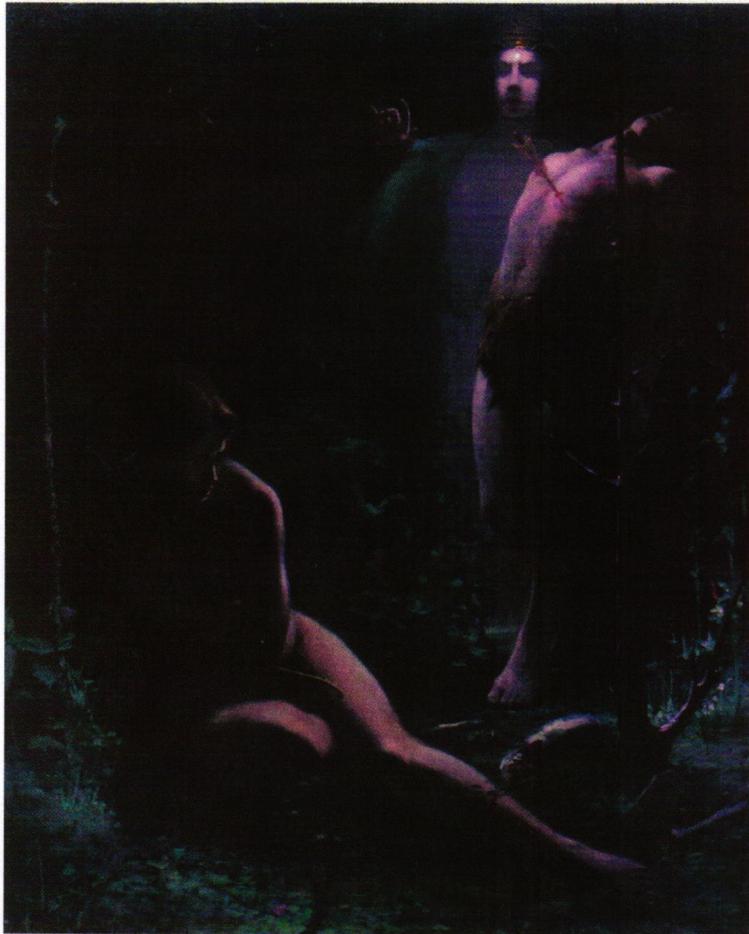
印刷 アート印刷株式会社

小林千古没後 100 年

廿日市市・モン・サン＝ミッシェル観光友好都市提携記念

小林千古 1900年 1900 PARIS PANTHEON とパリ・パンテオン会

KOBAYASHI SENKO



はろがち美術ギャラリー